

行き詰まり症候群

最終回 神体験

アンディ美湖

(訳：鈴木敦子)

疑いもなく、人間にとって最大の願いは神を体験することです。私たちの心を乱しているものを良く見てみれば、それらは、私たちがいかに神を求めているかの表れだとわかります。皮肉なことに、また悲劇的なことに、私たちは最も求めているはずのお方を避けることに長けています。愚かにも神を操作しようとしたり、神に定義を下そうとしたり、神をパッケージの中にこぢんまりとまとめようとしたりします。そんな無駄な努力によっては、私たちは失望し、空しくなるばかりです。それにもかかわらず、あちこちで雲の間から光が差し込んで来て、私たちは神の臨在の中に安らぐこともあるのです。人生は神との出会いに満ちています。名状しがたい微妙な出会いもあれば、霊的な元素を溶かしてしまうほどの劇的なものもあります。

ダイナミックな神体験は世界中に溢れています。インドネシアでの聖霊の働きを考えると、私たちは畏れかきこむばかりです。2、30年前、ティモール島では聖霊の風が吹き荒れました。奇跡が次々と起こりました。水がワインに変わり、死人がよみがえりました。よみがえらされた人は、数日間死んだ状態でいたので、彼のために祈っていた人々はその体の悪臭に吐き気を催すほどでした。

1224年にアッシジの聖フランシスが体験したことは、私たちをなぞに包み込んでしまいます。アルヴェルノ山で神との交わりに没頭する中で、彼はキリストの印をその身に受けました。手と足には釘の跡を、わき腹には槍の傷跡を。

より幻想的な神体験を望む人もいるかもしれませんが、苦しむ人の正気を保つために神が顕れて下さることもあります。あるチェコ人の牧師は、連日動かずに立っていることを強制されました。少しでも動けば共産党の拷問者に激しく鞭打たれるのでした。長い間立ちつづけたために足は見るかげも無いほど腫れ上がりましたが、毎日眠ることさえ拒みませんでした。ある日彼は窓に自分の姿が映ったのを見、その怪物のような姿にぞっとしました。痛みと絶望感が彼を打ちのめすと、突然キリストが現れ、彼を抱き、心を静め、心と精神を回復させてくれました。神体験は果てしなく多様です。

日本が神の祝福の大波を受ける時が来ている、と多くの人が確信していますが、それはどんな形で起こるのでしょうか。私たちはまだ見てはいませんが、それは日本の必要と願いに応じたものとなることでしょうか。このシリーズを通して、私は、日本が神の前に機は熟していると強調してきました。次のような兆候をどう思いますか。80年代半ばに行なわれたNHKの調査によると、もし日本人が宗教を選ぶなら、キリスト教を選ぶという人が3分の1を超えました。2、3年前にはウォルター・ワングリンの『小説聖書』が爆発的に売れましたが、それは単に聖書を小説の形式に書き直したものでした。また、キリスト教を好むたくさんのお若い新婚カップルがいます。結婚式の52パーセントはキリスト教式の結婚式を挙げられています。一般の会社がチャペルを建て、全く教会とは無縁の人々

で一杯にし、牧師に来て自由に説教してくれと頼む、そんな国が世界のどこにあるでしょうか。しかしこのようなことが現実には起きているのです。明らかに日本は神様の前に準備が出来ているように思えます。しかし今日の教会は共通して、メッセージ（場合によってはメッセンジャー）に対して社会が応答しないことを憂える傾向にあるようです。教会は、文化が変わり、オープンになり、人が教会に押し寄せてくることを待っています。しかし変化はすでに周囲にたくさん起こっています。新しい時代がやってきたのです。待ちつづけるのに終わりが来ました。もはや教会は今までのような在り方ではいられないのです。

この時代には、合理的な答えを見つけ出そうとする人はまれです。人生の意味を知りたいと思う人も、そう多くありません。日本では真実を求めている人と出会うことはほとんどありませんでした。しかし、私が呼ぶところの「いのち」を捜し求める人は何百人もいました。東京の六大学で伝道していたことが、この渇きに気づくきっかけとなりました。学生たちは真理の知識について興味を持ちませんでした、「生」の体験　つまり生きていることの実感　を執拗に求めていました。このような流れの中で、私は自分の伝道に対するアプローチを大きく変えなければならませんでした。「偉大なる神秘を心で経験すること」を、信仰の原則や教理より優先させることになったのです。人々はほかの人々の経験を通して生きている実感をつかみたい、と思うようになりました。90年代にベストセラーになった『五体不満足』を書いた乙武洋匡の砕かれた、しかし凜然とした体の中に、あるいは初めてのラーメンに喜び踊り、最後の一滴までうやうやしくスープをすする裸の「なすび」を通して。このような日本の、「生」に対して熱望している様子は Joseph Campbell の『Power of Myth』の中の言葉に良く表れていると思います。「人々は人生の意味を捜し求めていると言うが、私は、本当はそうではないと思う。私たちは生きていることを実感することを求めているのだ。それによって肉体において経験することが、我々の内面の最も深い部分において共鳴され、また、我々が生きているということを狂喜できるのである。」

ポストモダンの精神も大和魂も同じもの、つまり生きている実感を求めていると言えるでしょう。このシナリオは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」と語られたキリストと完全に調和しています。真理といのち、両面のバランスを取るために、私たちは違うところに焦点を当てるべきなのでしょう。なぜなら、いのちとは真理が受肉したものだからです。そもそも心の奥底で神に対する渇きを感じているのは、サイバー孤独に陥っている人、物欲に脅迫されている人、あるいは霊的に無知な人ばかりでなく、教会も同様なのです。しかし往々にして私たちは、大衆のみならず教会が求めているまさにその経験をしたことがないのです。R.D.Laing の言葉によれば、「この時代のきわめて多くの人々は神の臨在を経験していなければ、神が不在であることにも気づいていない。神の実在感そのものが、欠如しているのである。」

日本では、神体験はどんな形をとることになるのでしょうか。私たちは日本の将来の

可能性を想像することしか出来ません。古典神秘主義者の Jan Van Ruusbroec は、奔放で制限の無い神との結合の経験を説く中で、私の心をつらえました。「全ての神を愛するたましいは誰もが、神との喜びと至福の交わりに入ります。というのは、神にとっても全ての愛されているたましいにとっても喜びである、その祝福された状態というものは、非常に素朴で区別のつけがたいものである、神の人格の区別については、父も子も聖霊もなく、被造物との区別も無い、むしろ全ての啓明されたたましいは、どんな被造物もかつて受けたことがなく、受けることも出来なかった豊かさが溢れる、様式を越えた至福の喜びにまで引き上げられるのです。」

実際的な面においては、信仰大覚醒時代の、アメリカのリバイバリストである Charles Finney は、何百、何千という回心者を目撃し、実に具体的な言葉で説明しました。「リバイバルは神の働きです。麦の収穫も同じです。そして神は一方の場合に方法に依存している、ということが、他方においても同様にあてはまるのです。」これは逆説です。神体験は全くの恵みですが、同時に私たちの手にもかかっているのです。

私はキリスト教信仰のどの伝統も、教会に貢献するものを持っていると信じます。カトリック教会は深さを、正教会は神秘を、福音派は明確さを、自由主義教会は同情を、そしてペンテコステ派は、期待感を提供しています。そしておそらく今日の日本の教会にとって最大のギフトはこの期待感ではないでしょうか。神の祝福の大波が押し寄せてくると期待感です。

マルコの福音書 4 章にある嵐の中の弟子たちの物語は、今日の状況をうまく言い当てていると思います。イエス様と弟子たちはいつものように船出しました。しかし湖の真ん中で嵐が始まり、激しくなりました。弟子たちは慌て、圧倒され、怖れにかき乱されました。彼らは自分たちでなんとかしようとして慌てふためきましたが、無駄でした。嵐は大きすぎました。力を込めてこぎましたが、どこへも進めませんでした。彼らは行き詰まり、沈み始めてしまいました。「もうだめだ！」舟に乗っているのが誰かも知らず、彼らは叫びました。

神ご自身が私達の舟に乗っておられるのです。眠ったふりをして、待っています。単なる時間の問題です。

ブラジルの詩人であり、神学者である Rubem Alves の預言的な言葉です。

「われらは見知らぬところへ船出する

わがたましいの招きに従って

風は予期せぬ強さで吹き荒れる

そのとき 我等は 世界の終わりにいる

しかし同時に 我等は 世界の始まりにいる」

時は来ぬ。神に期待せよ。新しい教会を待ち望め。新しい世界を迎えよ。

(アンディ美湖の執筆は www.familylifejapan.org へ)